

特集 地域支援

「チョイソコかもがわ」

～地域全体の“自分ごと”として皆で育てる事業に～



千葉トヨタ自動車 株式会社

地域交通の維持は喫緊の課題

近年、人口減少や少子高齢化が進行する中、特に地方圏における地域公共交通を取り巻く環境は厳しいものとなっている。利用者が減少することで交通事業者の経営が圧迫され、維持が困難となることとますます衰退し、必要な公共交通サービスを受けることができない地域住民が増加する等、危機的な状況にある。

その一方で、住民は買い物や通院で、外出せざるを得ない現状もある。地方圏の自動車交通の特徴として、自ら車を運転する高齢者の割合が多く、高齢者による交通事故の増加のほか、車を運転することができない高齢者は「買い物難民」となるなど、地域公共交通の衰退による様々な社会課題も生まれている。

このように交通空白地域における移動支援が喫緊の課題となる中、地域に根差した企業体である自動車ディーラーにおいても危機感強い。

そのため、近年では株式会社 アイシンが開発・運営するオンデマンド型交通「チョイソコ」を活用し、ディーラーの地域貢献活動として、地域交通の課題解

決を目指す取組が進んでいる。

「移動の困りごと」の解決に向けて

千葉トヨタ自動車株式会社（出野 祥平代表取締役社長）は、かねてから地域貢献活動に力を入れており、その取組の一つである「チョイソコかもがわ（以下、本事業）」は、千葉県鴨川市における交通空白地域である長狭地域と鴨川市街を結ぶ乗り合い送迎サービスである。

本事業は、自販連及び一般財団法人 トヨタ・モビリティ基金が、全国の自動



出野 祥平 代表取締役社長



交通空白地域となっている長狭地域

車販売会社が取り組む移動課題の解決等、地域支援活動に対して行った助成金を活用し、2021年4月に実証実験としてスタート。交通空白地域における課題解決及び高齢者の外出機会の創出による健康促進のため、助成期間終了後も自社で出資し、運行を継続してきた。

交通空白地域となっている長狭地域は、人口約4100名、高齢者比率50%以上のエリアである。県道では路線バスが運行しているものの、脇道に入ると地形の起伏が激しく、自宅からバス停まで徒歩

で30分ほどを要する場所もある。このようなことから、自家用車を持たない高齢者の外出は非常に困難な状況であった。

そこで同社は課題解決に向け、検討を開始。車は移動の手段もしくは道具であることから、これまで自動車ディーラーとして続けてきた「車の困りごと」の解決に加え、「移動の困りごと」の解決に向け、チョイソコを活用した乗り合い送迎サービスの運行を開始した。

より地域に寄り添った移動支援を

前述のとおり、長狭地域はバス停に行くことも困難な地域である。一般的なチョイソコサービスでは、ゴミステーションを共通乗降場所に設定するが、本事業では、利用者の平均年齢が70〜80代となっていることから、自宅前での乗降を可能としている。このように非効率であっても、より地域住民に寄り添ったサービスを提供することを優先している。

また、鴨川市には35の科を抱える大規模病院「亀田総合病院」があり、長狭地域から通院する住民も多い。しかし、長狭地域から同院までは20kmほどの距離があり、車でも往復約1時間を要する。



亀田総合病院敷地内に「チョイソコかもがわ」の乗降場所を設置



同院の担当者は、「交通空白地域における交通手段の確保は悩みの種であった。年金生活の高齢者も多く、タクシーを利用した場合、片道で数千円かかるため現実的ではない。ライフラインとも言える通院のためには、利用しやすい交通サービスの整備が必須であった。公共交通の維持が難しい状況の中、モビリティに精通した千葉トヨタ様に相談を持ち掛け」と話す。同院は現在、本事業のメインパートナー企業として協賛し、共通乗降場所を設置。チョイソコを利用して通院する患者も多く、まさに住民のライフラインとなっている。

なお、本事業の運行開始から2年半が経過した現在、取組に賛同し、協賛金を出資するパートナー企業・団体は27に上り、長狭地域及び鴨川地域における買い物施設、医療・介護施設、公共施設等の乗降場所は、54か所にまで増えている。

外出機会の創出による地域活性化

本事業の目的には、送迎サービスを行うことで、高齢者の外出の機会を創出することも含まれる。同社は、「高齢者の健康増進に貢献することで、ひいては地

域を元気にしたい」との思いから、官民合同による「コトづくりの会」を定期的に開催している。店舗における「トヨタマルシェ」のほか、地元の病院施設や損保会社、社会福祉協議会等と連携し、認知症予防や介護予防、健康維持といった高齢者の関心が高いテーマでセミナーを開催している。なお、開催情報はチョイソコ車両内に掲示するほか、毎月利用者に配布している「チョイソコかもがわ通



定期開催される「健康づくり教室」で高齢者の外出機会を創出

信」で情報発信している。取材当日は、地域のふれあいセンターにおいて「健康づくり教室」と題し、介護保険制度やボランティア活動の推進に関するセミナーが開催されており、16名の参加者が真剣な面持ちで耳を傾ける姿が見られた。

地域全体の理解・協力が不可欠

千葉トヨタ自動車が行う運行主体となり運営する本事業だが、事業の開始や維持のためには、関係各所の理解や協力が欠かせない。地域の社会福祉協議会や自治体のほか、地元の企業や住民をも巻き込んだ取組とすることが重要である。

① 地元企業や交通事業者の協力

まず、必要となるのが地元企業の協力である。パートナー企業への協賛金の出資協力のほか、利便性向上の観点からも乗降場所の設置等の協力は欠かせない要素である。

また、地域雇用の維持の観点からも、既存の交通事業者への配慮も必要である。本事業においても地元のタクシー会社に運行委託し、チョイソコ専任のドライバ

ーを雇用してもらい協力を得ている。タクシー事業者としても安定した収入を得られる仕組みとすることで、WIN-WINの関係構築している。

さらに、チョイソコの運行時間を午前8時～午後4時に限定し、一定の不便を残すことで、既存の交通事業者に配慮し、理解を得ている。

②地域住民の協力

このような取組を進める上では、地域住民の声は重要なファクターとなる。本事業では、住民に対する丁寧な説明を繰り返し行うことで、各地域の区長をはじめとした住民自らが「自分ごと」として普及や利用促進に率先して協力している。その結果、本事業の会員数は現在、900件を超え、利用数についても右肩上がりです。

③社会福祉協議会の協力

福祉の観点から、地元の社会福祉協議会との連携も重要となる。

鴨川市社会福祉協議会の担当者は、「我々は行政的な側面が強いこともあり、民間企業と協力して何かを始めることは

非常に難しい。本事業に協力するに当たっては、高齢者等が家に籠ってしまいう現状を解消し、健康維持を目指すという点が非常に大きかった。地域貢献を推奨する企業と課題を抱える地域を結び、5年後、10年後を見据え、皆が協力することが重要である」と話す。

④地元自治体の協力

広がりを見せる本事業だが、運賃収入や協賛金収入だけでは運行継続は難しい。前出のとおり、本事業においては現在、自社の出資により運行を継続しているが、令和6年度からは鴨川市が赤字を補填し、実証運行を1年間継続することが決定している。また、市のコミュニティバスの再編に伴い、従来の長狭地域に加え、江見地域及び天津小湊地域での運行を開始するなど、自治体と連携した事業を展開している。

なお、コミュニティバスの再編に伴い、チョイソコ運行時間の前後には、交通空白地域に住む小中学生のスクールバスとして運行することとしており、今後は、高齢者以外の住民にとっても重要な交通手段となる。

このように、本事業では地道な普及活動により地域の仲間を増やし、さらに各々が役割を果たすことで「皆で取組を育てていく」という意識が生まれ、大きなうねりとなっていった。送迎サービスを通じ、「自動車ディーラー」ではなく、「地域の仲間」として認知され、信頼されている。



長狭地域と鴨川市街を結ぶ「チョイソコかがわ」